

## コミュニケーション能力の育成を目指したワークショップの試み

吉賀 伸 | Shin YOSHIKA

### 1. はじめに

教養ゼミWS(ワークショップ)を担当して今回で3年目となった。WSクラスでは受講生34人のクラスを同時に2つ受け持ち、教員がディレクターとして授業全体を設計し、クラスごとに配置したファシリテーターが進行役となってWSを行う形式をとっている。ファシリテーターと吉賀との3人体制で本授業を行うにあたり、まずWSを主体とした本授業の目的と意義についての共通理解を得ることから始め、各ファシリテーターの得意分野や個性が生かせるWSのアイデアを出し合い、細部の工夫や学生へのフィードバックの方法について話し合った。本授業の目的と意義に当たるものとして、25年度のシラバスに記載された「科目の目的と到達目標」は以下の通りである。

- ・「参加」「体験」「相互作用」を通して「身体性、意欲、自主性、社会性」の4つの力を自らの内から喚起し、体得する。
- ・コミュニケーション力の向上。発想力の訓練。五感を働かせ、手を動かして身体感覚を取り戻し、身体に記憶させる。
- ・表現者としての基礎を身につけ、表現することの面白さを体験する。
- ・相互作用を通して多様な個を認識し、学びあうコミュニティを創造する。

また「授業の概要」として以下のようにある。

- ・WSを体験して、体験知をストックする。みんなで考えてWSをデザインする。展示・発表・レビューに向けて共同作業する。
- ・毎回評価シートを書き、合評し、学修ポートフォリオを作成して、体験を言語化する。

それらを踏まえて設計した授業の流れとしては、

#### 1. ガイダンス、自己紹介のためのWS

#### 2. アイスブレイクのためのWS

#### 3～9. 個人またはグループで行うWS

#### 10～14. クラス展示に向けてのWS

#### 15. 展示発表

である。吉賀クラスでは初回から最終回までコミュニケーションを最重要な核として、「体を動かすWS」、「話し合うWS」、「作るWS」をファシリテーターの発案をベースにクラスごと別々のメニューを考えて実行した。15週間のうちに行ったWSは、2クラスを合わせると9つとなり、70人規模で行える内容については合同で行ったものもある。

### 2. 具体的な授業内容と取り組み

ここでは前述の授業の流れに沿って、片方のクラスで行ったWSについて幾つか採り挙げ、その内容と取り組みについて紹介する。

#### 2.1 アイスブレイクのためのWS「ダンス・ダンス・ダンス」

##### ○内容

教養ゼミWSクラスは様々な学科コースから学生が集まり、入学後間もなく行われる。1週目で自己紹介のWSを終え、クラスの人となりはお互い知るところとなったが、教室はまだ固い緊張感に覆われている。今後のコミュニケーションを主軸としたWSを円滑に進め、最終的にクラス展示へと導くためにも、次の段階ではクラス内のアイスブレイクをおこない、良い雰囲気を作っていくことが重要であると考えられる。

このWSは体を動かすことによってクラスの人同士打ち解け合うように考案したものである。他者の動作を真似てシンクロすることを通して、身体的に共感することからもコミュニケーションが生まれることを体験する。動作からその人の感覚・感性・特有性を感じ取り、それを共有する。また他者にそれらを見つけ出してもらうことで自分自身を再発見することもできる。最後にはその動作をダンスの振り付けとしてパターン化し、皆の前で楽曲に合わせて披露することで羞恥心や内向性を取り払うことを狙いとした。

#### ○手順

- ① 2人1組となり、片方が数分間無音で何かしらの動作をする。もう片方はその動きをひたすら真似てシンクロする。
- ② 役割を交代して同じことを行う。
- ③ 互いに話し合い、特徴のある動作をピックアップして2人1組で一連の動作パターンを考え、2人でその動きが同時にできるよう練習する。
- ④ 2つの組を合わせ4人1組となり、お互いの動作パターンを披露・シンクロしあう。
- ⑤ 4人で話し合い、これまでの動作をブラッシュアップして4人1組での一連の動作パターンを作る。4人でその動きが同時にできるよう練習する。
- ⑥ 最後に曲に合わせ、皆の前でダンスとして披露する。  
(どうしても恥ずかしい人は紙袋の仮面を着用する。)

### 2.2 グループWS「ストップ・セッション」

#### ○内容

このWSは、ありふれた日用品や自然物のなかから、音だけに注目して集めた物をそのまま楽器として使い、グループでセッションを行うというものである。物の一般的な使用価値や形態にとらわれず、それぞれ独自の選定眼やアイデアをもって取り組み、それをグループで共有することが目的である。様々な物から生ずる様々な種類の音を駆使して楽曲を作り、演奏する。楽曲作りでは持ち寄った物を生かした曲のイメージを決め、リズムを考える。一度きりのセッションではグループの息を合わせ、同調させなければならない。音を媒介とした共同作業であり、五感で楽しみながら他者との交流が図れる内容とした。

#### ○手順

- ① 個人で様々な種類の「音」を探し、持ち寄ってくる。
- ② 4人1組となり、持ち寄った物について、叩く・こする・振るなど、様々な音の出し方についてアイデアや意見を交わす。
- ③ 必要であれば簡単に加工を施す。(ここでは見た目のデザインは重視しない。)
- ④ 楽曲のイメージについて話し合い、リズムを考える。
- ⑤ 皆の前でセッションを披露する。



【写真1】 持ち寄った物について意見交換



【写真2】 セッションと鑑賞

### 2.3 グループWS「見えない風景」

#### ○内容

写真家であり、国内外のアートシーンで活躍する下道基行氏<sup>1</sup>を特別講師として招いて行ったWSである。下道氏が考案し、国内の様々な場所で行っているWSを本クラスにて2週かけて行って頂いた。このWSでは本学敷地内にある全ての建物と屋外の端から端までを行動可能な範囲とし、グループで話し合って地図を作る。ただしその地図は、図を用いず、言葉のみで示したものであり、学内の何処かの場所をゴール地点と定め、スタートとなる教室からそこ

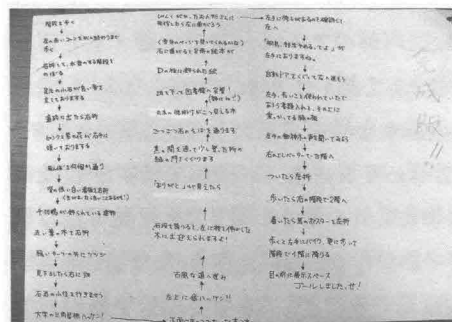
まで歩いて辿り着くことのできる地図である。地図を作るにあたって、人を誘導するためのランドマーク(目印)となるものを言葉で表し記入することになるが、そのものを示す固有名詞は使ってはならないという決まりを設けている。ランドマークをどのような言葉で表現するかを考え、地図を手渡された者が楽しめて且つ確実にゴールまで辿りつけるよう配慮しなければならない。そこでは客観性と想像力が必要となる。また地図を手に歩く際には、作った人の目線と言葉選びの感覚を追体験することとなり、歩くという単純な行為のなかで様々な価値観と出会うことになる。



【写真3】 地図を片手にグループで散策



【写真4】 言葉の地図を作る作業



【写真5】 完成した言葉の地図

## ○手順

- ① 3人1組となり、サンプルとして用意された言葉の地図に従って学内を廻る。(途中で白紙が隠されており、地図にはそれを拾ってくるよう指示してある。)
- ② 白紙を持って戻ってきたところで、WSの趣旨と言葉の地図の作り方について説明する。
- ③ グループで学内を散策し、ゴール地点とそれまでの道筋、途中にあるランドマークの取材に出かける。
- ④ 3人で話し合い、白紙に言葉の地図を書き入れる。
- ⑤ 完成した地図でゴール地点まで辿り着くことができるか、実地検証する。
- ⑥ 他のグループと地図を交換して、3人で学内を廻る。
- ⑦ 交換したグループと意見・感想を交わす。
- ⑧ まとめ。全体を通しての感想を発表する。

## 2.4 クラス展示に向けてのWS「オト」

### ○内容

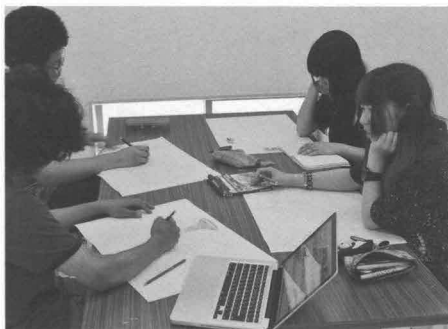
教養ゼミの成果発表となる展示に向け、5週かけて行ったWSである。このクラスでは「ストップ・セッション」で音を媒介としたコミュニケーションを体験したが、このWSはそれを発展させて、ものの作りの要素を入れ、クラス規模に拡大したものである。ここでは単純に音が出る物を持ち寄るだけではなく、そこに音色を変えるための工夫を施すという課題を与えた。数人でグループとなり、身近にある物を用いてオリジナルな楽器をデザインし、制作する。その過程では楽器作りのための話し合いと試作・実験を重ねる時間を多くとっているが、ここで共同制作のために必要なコミュニケーション力が培われることを狙いとしている。創造活動のなかでお互いの価値観をぶつけ、妥協し、共有しながら、より良いものを作ることを体験してもらう。最終展示では、見た目の造形にも配慮して制作したそれぞれの楽器を一つの立体作品として組み立て、巨大な楽器として展示した。

そして最後にはクラス全員でその楽器を演奏し、最後のセッションを行った。

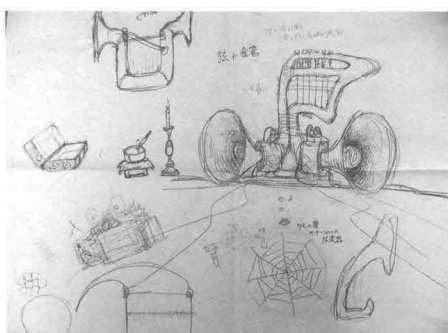
### ○手順

#### 1週目

3・4人で1組となってアイデアを出し合い、楽器作りに



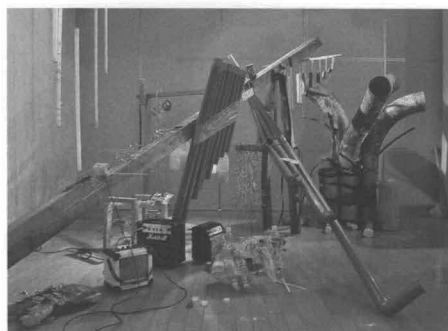
【写真6】グループでアイデアを出し合う



【写真7】楽器のデザイン例



【写真8】グループで楽器制作



【写真9】楽器を合体させて作品完成



【写真10】全員で最後のセッション

必要な物を持ち寄ってくる。

## 2週目

楽器のデザインについて話し合い、試作と実験を重ねながら改良を重ねる。

## 3週目

楽器を制作し、グループで1作品を完成させる。

## 4週目

展示会場で全グループの楽器を一つの立体作品として組み立て、設置する。

## 5週目

「春夏秋冬」を楽曲のイメージに設定し、それぞれの楽器をフルに使って全員でセッションを行う。最後にこの授業を通してのまとめを行い、1人ずつ感想を発表する。

## 3. おわりに

本授業を通じて学生に得てもらいたかったことは、体を動かしながら感じる事、他者の考え方やものの見方に触れて共感すること、他者と関わることで様々な表現が生まれる可能性を知ることであった。そのためには学生自身が主体的に取り組めるようなシステムをWSのなかに組み込む必要があり、その上で学生の積極性を触発する指導力が求められる。WS形式の授業では特に教員とファシリテーターの人間性が学生の学びの達成度に深く関わってくるものであるが、吉賀クラスでは幸いにもスタッフに恵まれ、充実した授業を行うことができたという実感がある。

また学生にとってここでの体験が一過性のもので終わら

ないよう、毎回のWSごとに用意した自己評価シートにそれぞれの取り組みの内容と感想、反省すべき点などについて言語化し、文章として残す作業も行っている。最終的には全活動の様子を画像なども交えた学修ポートフォリオとして1人ずつ1冊のファイルにまとめさせ、毎回の自己評価シートとともに成績評価の材料とした。そのなかでは概して学生個々の成長が見受けられ、WSを重ねる度に新たな知見を得ていたことが認められた。

最後に希望として、学生がこの機会に出会った価値観や人間関係を今後の4年間、あるいは将来の何処かで生かしてもらうことを願いたい。本授業では短い時間のなかにその糸口を与えられたに過ぎない。ここでの体験を振り返りながら、時間をかけて育み、それぞれのかたちとして結実させることができたときに、はじめてこの授業の真の成果があったと言えよう。

---

註

1. 写真家、現代美術家。1978年岡山県生まれ。2001年武蔵野美術大学造形学部油絵科卒業。写真や文章を表現手段に、モノ／コトの残り方／消え方、それらを内包する風景の在り方など、目の前に広がる風景に興味を持ち、旅やフィールドワークをベースに活動している。「光州ビエンナーレ2012」、「あいちトリエンナーレ2013」、「六本木クロッシング2013」をはじめ国内外の様々な展覧会に招聘され、個展も多数開催。その他、主な出版物に「戦争のかたち」(2005)、「日曜画家」(2013)などがある。

---

[執筆者]

吉賀 伸

Shin YOSHIKA

芸術学部 美術科

Department of Fine Arts, School of Art

講師

Lecture

